

地域プロジェクト成果報告書

上野智子 千田陽菜 藤垣杏奈 久保田彩夏 田村美里

(指導教員：佐藤香織)

1. はじめに

私たちが行った地域プロジェクトは、「外国にルーツを持つ児童への日本語学習支援プロジェクト」である。主にこの報告書では、一年間を通して行ったプロジェクトの内容と成果について述べる。

2. 背景・目的・概要

現在、外国にルーツを持つ児童への日本語教育は日本語教育の領域における大きな課題の一つとなっている。そして、函館の小学校においても日本語学習支援を必要としている児童が存在する。そのため本プロジェクトでは、以下の三点を目的として活動を行った。

- (1) 児童の日本語能力の向上
- (2) 実施者の日本語教育実践
- (3) 地域の教育機関との連携

プロジェクトの概要は、支援を必要としている児童への日本語学習指導、小学校側の日本語支援環境、体制作りへの参画、やさしい日本語と児童の母語を使った、国語の説明文のリライト教材の作成の三つである。日本語支援の対象者は、韓国出身の小学校5年生の男子児童と、韓国出身の小学校6年生の女子児童である。

3. 年間スケジュール

表1 年間スケジュール

10月 連携先の学校との調整	3月
11月 東山小学校 指導	4月 東山小学校・湯の川小学校指導
12月 東山小学校 指導	5月 東山小学校・湯の川小学校指導
1月 東山小学校 指導	6月 東山小学校・湯の川小学校指導
2月 東山小学校 指導	7月 東山小学校・湯の川小学校指導 東山小学校・湯の川小学校指導終了、 評価アンケート作成・回収

東山・湯の川
基本的にどちらにも
週1回継続的に行っていた

4. プロセスと成果

本プロジェクトでは、東山小学校と湯川小学校の二校で日本語支援を行った。

まず、東山小学校の対象者と活動内容について述べる。対象者は、韓国籍5年生男子児童で、幼稚園時に来日し、日常会話に問題はない。活動内容は、2017年後期に、教科書の音読と授業中の日本語支援、助詞の穴埋めを行った。さらに、2018年後期には、漢字の読み書きと作文の書き方を指導した。活動の成果は、漢字の読み書きのミスが減ったことと自分で考えて長文が書けるようになったこと、児童の学習への意欲向上が見られたことの三点である。

次に、湯川小学校の対象者と活動内容について述べる。対象者は、韓国語が母語の6年生女子児童で、昨年11月に韓国より来日し、日常会話もまだ不完全な状態である。日本語の読み書きも授業のペースに追い付けなかったり、韓国語で書いて理解したりしていた。活動内容は、授業中のサポート、休み時間を利用し日本語での会話、取り出し授業（漢字、作文の指導）、リライト教材の作成を行った。対象者は、日本語での会話もなかなかうまくできず、漢字の読み書きや作文は韓国語で書いていたことから、この二つに重点を置き、支援した。リライト教材については、国語の教科書（説明文）を、やさしい日本語かどうかをチェックし、理解するのが難しそうな語句や文を、かみ砕いたり、ハングルでルビを振ったりして作成した。対象者が普段の学校生活、授業において、日本語の文章を日本語で理解する（読み書き話す）ことに躓きが見られるため、リライト教材を作成し、スムーズに日本語が理解できるようにリライト教材を作成した。また、教科書の文章に出てくる日本語文法の問題を作成し解いてもらった。実際に、リライト教材を使用してみて、対象者は文法問題もすらすら解けて、読解もできていた。しかし、思っていたよりも漢字が読めていなかった。全体的な活動の成果は、だんだん会話をしてくれるようになったこと、日本語での学習に意欲的になったこと、日本語で文を書くようになったことが挙げられる。

5. 総括と反省・今後の課題

〈東山小学校〉

東山小学校の活動では、小学校高学年に上がる上で必要になる、日本語の長い文章を書く力の向上を図ることができた。しかし、誤用の原因が論理的思考力の不足なのか、日本語の文構造の理解の不足なのか見極めが難しいことが反省点である。

〈湯川小学校〉

反省点は多く、初めは、児童と会話をする時間が少なくコミュニケーションをうまくとれなかったことや児童の日本語レベルの把握に時間がかかったこと、取り出し指導をする時間を支援スタート時から確保できていれば良かったことが挙げられた。また、課題として挙げられたのは、中学校へあがることを見通し、学習内容のレベルを上げる（主に作文、自分のことを日本語で話す）ことが挙げられた。リライト教材を

使用した指導が今後も必要である。

6. 地域からの評価

〈東山小学校〉

対象となった児童は、支援する学生がいると安心して学習しているように見える。普段と極端に様子が違うということはないが、継続して支援を受けていることで、安心感のようなものを持っているように感じている。

対象児童は、現時点では日本語での交流に戸惑っている様子はほとんど見られない。ただし、言いたいことを日本語で的確に伝えようとすることは、他の児童と比較して困難な時があるように感じる時もある。そのような時に、うまく支援の学生に介入していただき、伝えたいことをわかりやすく言えるような支援が今後も必要かもしれない(ただし、このような課題に対しては心情的に関わる部分が大きいように感じています。児童自身で取り組むことかもしれません)。

〈湯川小学校〉

当該児童のために、お忙しい中にもかかわらず、専用の教科書を作成していただいたり、課題プリントを作成してくださったり、本当にありがとうございました。

当該児童についてですが、おかげさまで、1学期間における指導の成果と課題が明確になってまいりました。今では、日直としての号令「起立」「これから〇〇を始めます。」「いただきます・ごちそうさま」を言えるようになったこと、授業での振り返りカードへの感想を書く活動など、頑張って日本語を使った文で書くなど、一番は『意欲的に取り組むこと』ができるようになってまいりました。一方課題としては、これからも、文を書くことができるようになること、言語において、まだまだ難しい言葉を獲得しているものの、逆に2年生ぐらいの低学年段階で身に付けるべき言葉を知らない(穴がある状態)などが見受けられます。

ですが、前にも記述した通り、『意欲的に学ぶ力』と、『友達とともに学ぶ力』を身に付けることができたのは、大きな財産です。

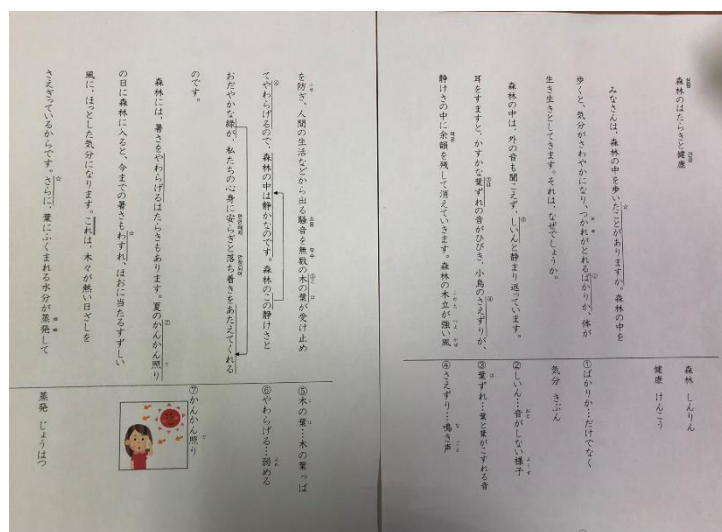
〈JTS (函館日本語教育研究会) 武村英剛先生〉

学生が、地域が抱えている課題を見つけ、さらには地域の機関や人々と協力しながら解決していくという試みは素晴らしいと思います。今回は小学6年の女子児童の支援ということもあり、年齢の離れた男性である私の支援だけでは不十分であると感じていたところ、大学生の支援を受けられた児童も安心したことでしょう。支援を受ける側が支援者を選べない環境ではなく、支援を受けたいと思える人をいろいろな人選から選べるような地域をつくっていくという観点からも良い試みだと思います。支援にあたっては、児童と親しく接するだけでなく、日本語の習得段階を見極めなが

ら補助教材の制作をしていたようで、日本語教育を専門に学ぶ学生だからこそできる支援だなと感心いたしました。

ただ心残りなのは、私も含めてですがお互いに児童の様子について、情報交換ができなかったことです。週に一度とまではいかななくても、月に1度くらいはメールなどでのやりとりができればよかったかもしれません。

リライト教材



7. 参考文献

・やさしちゅエッカ―<http://www4414uj.sakura.ne.jp/Yasanichil/nsindan/>